目次

はじめに …… 3

第1章　労使関係論の起源――労働組合論としての出発（一九世紀末～一九五〇年代）
1　労働組合の構造と機能の理論――シドニー・ウェッブとビアトリス・ウェッブ …… 21
2　ギルド社会主義論から労使パートナーシップ論へ――G・D・H・コール …… 49

第2章　労使関係論の形成――プルーラリズムの黄金期（一九六〇年代）
1　産業民主主義としての団体交渉――ヒュー・クレッグ …… 79
2　倫理的社会主義と労働規制論――アラン・フランダース …… 100
3　ラディカル・プルーラリズムへの転回――アラン・フォックス …… 120

第3章　労使関係論の欠陥――法的規制論と人的資源管理論の台頭（一九八〇年代）
1　労働組合にたいする法的規制論――ベン・ロバーツ …… 139
2　労使関係管理論から人的資源管理論へ――キース・シスン …… 155

第4章　労使関係論の刷新Ⅰ
――マルクス主義派の挑戦と分岐（一九七〇年代と九〇年代）
1　ニューレフト・マルクス主義から制度派へ――リチャード・ハイマン …… 175
2　労働規制論と労働史研究の結合――デイブ・リドン …… 195
3　古典的マルクス主義から資源動員論へ――ジョン・ケリー …… 210

第5章　労使関係論の刷新Ⅱ
――ネオ・プルーラリズムとマテリアリズム（二〇〇〇年代以降）
1　ネオ・プルーラリズムの提唱――ピーター・アッカーズ …… 235
2　マテリアリズムの構造的敵対論――ポール・エドワズ …… 250

終　章　要約と含意
1　要約 …… 268
2　含意 …… 284

あとがき …… 291

コラム一覧

①『産業民主制論』のトリビア――英語版よりもドイツ語版が先に出た……47
②先進諸国の労働組合の主要な組織形態――その背景の違い……72
③モンターギュ・バートン・プロフェッサー……74
④ドノバン委員会――メンバー・会合・調査……96
⑤J・D・M・ベル――大学教員から使用者団体役員へ……98
⑥ジョン・ダンロップ『労使関係システム論』……116
⑦R・ウォルトン、R・マッカーシー『労使交渉の行動理論』……118
⑧エミール・デュルケムの労使関係論……132
⑨マックス・ウエーバーの労働者・労使関係論……135
⑩ウェッブ夫妻はなぜ労使関係論から離れていったのか――ベン・ロバーツの謎解き……153
⑪「仕事」基準と「人」基準――M・アームストロングの解説……171
⑫ジャック・ジョーンズ――「ユニオン・マン」の生涯……193
⑬キール大学争議――労使関係論の拠点への攻撃……208
⑭労働組合の左派役員――共産党の衰退後、トロツキストが台頭……230
⑮イギリス共産党の終焉――内部抗争の激化による破局……248
⑯マルクスとエンゲルスの「三つの戦術」……263
⑰イギリスの労使関係論学会……265

あとがき

この本を書く最初のきっかけは、勤務先の専修大学の研究員制度（いわゆるサバティカル）を利用して、二〇〇〇年九月から一年間、イギリスのストーク・オン・トレント市にあるキール大学（コラム⑬を参照）に客員研究員として滞在し、研究したときのことにある。

運輸・一般労働者組合（TGWU）の一九六〇年代後半から七〇年代初期にかけての組合改革を研究テーマにしたことと、『労使関係史研究』というジャーナルを発行していたのでキール大学を選んだのだが、大学院修士課程でデイブ・リドン（第4章を参照）らが三つの必修科目（core courses）の講義をおこなうというので興味を持ち、三か月ほど聴講させてもらうことにした。それまで、日本の労働組合運動の再編成の道程や戦後の建設産業の労使関係の研究をしながらではあったが、イギリスの労働組合・労使関係についても断続的に研究してきていたので、史実について初めて知ったということは少なかったけれども、労使関係論の学説の歴史や理論については大きな知的刺激を受けた。

帰国して三年後に「運輸・一般労組（TGWU）の組合改革・再論――その思想と組織論の含意」（『専修経済学論集』第三九巻第一号、二〇〇四年七月）を発表し、さらにその後に「イギリス労使関係論におけるプルーラリズムとマルクス主義――論争の系譜と現段階」（法政大学大原社会問題研究所・鈴木玲編『新自由主義と労働』御茶の水書房、二〇一〇年）を書いた。

イギリスの労使関係論については、その後も関心が継続し、学者の著書や論文を読み、また労使関係論に影響を与えている社会学の理論についても勉強してみた。その成果を大学の学部と大学院で講義としておこなってもきた。

そこで、一昨年、『労働法律旬報』に「戦後イギリスの労使関係論の諸潮流」と題して一〇回にわたり連載をさせていただいた。それをもとにしながらも、かなり修正・加筆し、さらに新稿を含めてまとめたのが本書である。連載のときのタイトルと掲載号は以下の通りである。

(1)「倫理的社会主義と労働規制論」（アラン・フラダース）一九三三号
(2)「産業民主主義としての団体交渉」（ヒュー・クレッグ）一九三五号
(3)「ラディカル・プルーラリズム」（アラン・フォックス）一九三七号
(4)「ニューレフト・マルクス主義」（リチャード・ハイマン）一九三九年
(5)「マルクス主義と『資源動員論』」（ジョン・ケリー）一九四一号
(6)「労働規制論と労働史研究」（デイブ・リドン）一九四三号
(7)「ネオ・プルーラリズム」（ピーター・アッカーズ）一九四五号
(8)「マテリアリズム（唯物論）」（ポール・エドワズ）一九四七号
(9)「総括と論点（上）」一九四九号
(10)「総括と論点（下）」一九五〇号

連載論文は、本書の第2章、第4章、第5章と終章のもとになる内容であった。言い換えれば、第

1章（起源）と第3章（法的規制論、人的資源管理論）は新稿である。また、その新稿の部分を含め、雑誌連載時とは内容がかなり異なるので、当然、終章も新しくした。

もとになった論文の連載とその書籍化にあたって、『労働法律旬報』の古賀一志編集長に大変お世話になった。実は、この連載の直前に、やはり勤務先の研究員制度を二〇一六年九月から半年間利用して、ロンドンにあるウェストミンスター大学の建築環境研究センターで勉強した成果をまとめた「イギリス建設産業における労使関係――歴史的な展開とその論点」を同誌に三回にわたって書いていた。二〇一九年は一年間で一三本の原稿を掲載させていただいたわけである。また、書籍化にあたって、私から申し出たところ快く相談にのっていただき、このようなかたちで出版できることになった。あらためて御礼を申し上げたい。

勤務先の大学の定年を二年後に控えていたのだが、一年前倒しして来年三月に退職することにした。「卒業論文」になる本書が少しでも多くの読者を得て、労使関係論をめぐる議論を活発にするうえで、わずかでも貢献できることを願っている。

二〇二一年四月

著者